

おわりに

横浜国立大学教育人間科学部 教授

海老原 修

$P=C \cdot \int E(M)$ とは行動体力を表現する猪飼（1974）の数式である。P（performance）は成果とか成績・記録に、C（cybernetics）は身体の自動制御の因子、具体的には運動制御能力あるいは技術・技能に相当し、E（energy）はそのままエネルギー、括弧内の M は意欲（motivation）となる。出力の順序は、意欲（M）によってエネルギーが動員されて、ある力（E）が出る。するとこの力を全身的に総合した $\int E$ を、技術（C）がまとめて、一定の成績（P）が生じる。スポーツ競技にあてはめれば、競技力＝体力×技術×気力となる。気力はMに相当し、とくに体力のエネルギー発揮に関係するので体力（気力）として、気力の函数として体力をあらわすこともできる。

オリンピックであろうがパラリンピックであろうが、嫌々参加する選手はあり得ず、気力（motivation）は同量であると算定すると、たとえば、障害者を特徴づける片手片足あるいは片脚の損傷・欠損は上記の数式に示す E（energy）の質量が劣るのか、それとも C（cybernetics）の自動制御に問題が生じているのだろうか。それを質す試論として 100m 徒競争（片脚走）をシミュレートしたい。かかる障害者に片脚を折りたたんだ健常者が挑む構図となる。健常者には折りたたんだ片脚が存外と負荷となるかもしれない。片脚跳びに慣れる運動制御能力は存分に発揮できるのか否か。このような不平の裏返しを障害者は健常者に吐露してもよい。損傷・欠損する義足はそれなりの重量があり、その操作に慣れる運動制御能力が加味されていると想像してもよい。

本報告書「我が国のパラリンピアンを取り巻くスポーツ環境調査」は、「パラリンピアン」のスポーツキャリアに関する調査」「パラリンピック指導者の現状に関する調査」「パラリンピック競技団体活動調査」の3つの調査研究を取りまとめた。

折しも開催したソチ・パラリンピック 2014、狩野亮（かのう・あきら）はアルペンスキー男子滑降・スーパー大回転（座位）で金メダル2個に輝く。小学3年の交通事故による脊髄損傷で落ち込むが、アーチェリー、車いすマラソン、車いすバスケットボール、水泳など、家族がやりがいを見つけるべく、いろいろなことに挑戦させて、中学1年でチェアスキーにたどりつく。狩野がさまざまな事柄に挑戦するスポーツ環境を、家族や友人、学校、指導者、競技団体が偶然につくりだしたのだろうか、それとも、とりわけて恵まれた環境にあったのだろうか。

生来の、あるいは、後天的に出来した状況の中で、存分にその身体能力を開花できるスポーツ環境を整備しなければ、もったいないと考えてみたい。障害者だれにでも、その挑戦と応戦が保障されるスポーツ環境の基盤整備の戦端を本報告書が切るならば遅くに失している。障害者はもとより障害者競技スポーツ選手への分かち合いの心性が踏みにじられてきたと自戒する。